

経済学史学会ニュース

The Japanese Society for the History of Economic Thought

No.54

July 2019

総会（幹事会）報告

2019年5月31日（金）に常任幹事会・幹事会が、6月1日に総会が福岡大学・七隈キャンパスで開催され、第16回研究奨励賞の授賞式も行われました。開催校と会員各位のご協力により参加者が約140名を超え、懇親会も盛大に行われました。この場を借りてお礼を申し上げます。

総会は姫野順一議長のもとに行われました（書記は佐藤方宣）。以下の事項が報告され、一部継続審議になったものを除き、すべての協議事項が出席者によって承認されました。

報告事項

1. 会員移動について：現在会員は529名であり、退会者は48名、うち44名は長期未納者であることが報告された。
2. ウェブサイト経由での入会手続きについて：従来は紹介者2名の署名のある入会申込書（現物）の提出が必要であったが、昨日の幹事会で今後はメールで紹介者を確認し、入会申込書の提出を求めないことが決定されたとの報告がなされた。
3. 83回大会：開催校の山崎好裕会員から挨拶があった。
4. 次回（84回）：大会校の佐々木憲介会員より挨拶があり、2020年5月30日（土）・31日（日）に北海道大学で開催予定である旨の報告があった。
5. 第16回研究奨励賞：塩見由梨「ジェイムズ・ステュアートの商業論」『経済学史研究』59巻2号（2018年1月）に論文賞を授与することが報告された。

6. 各委員会報告（詳細は ページ）

7. 日本経済学会連合報告：有江会員より、日本経済学会連合の現状について報告された（詳細は ページ）。

8. 第3回経済学史学会賞：小峯会員より、該当作なしとの報告がなされた。

9. 学会共同企画・国際連携：国際アダム・スミス学会の東京大学での大会開催について、ローカルオーガナイザーの野原慎司会員より、篠原久会員が招待講演をされることが紹介されるとともに、報告の呼びかけがなされた

協議事項

1. 2018年度決算（会計監査報告）：代表幹事から決算の説明、中井大介監事より会計監査について報告があり、承認された（詳細は3頁）。
2. 2019年度予算：代表幹事より、学協会サポートセンターへの委託業務の内部化に伴う部分の説明があり、今後予想がつかない点についても加味して予算案を作成したこと、また、同時に事務局補佐を書記と庶務の2名体制にしたことについても説明がなされ、予算案が承認された（詳細は4頁）。
3. 会則の改正について：代表幹事より、総会資料にもとづき報告がなされ、代表幹事の交代による通常の会則改正のほか、終身会員制度の新設に関する会則改正案が提案された。このうち終身会員制度については会場から多様な意見が出されたため、継続審議とすることが承認された。

4. 研究奨励賞の授与式:賞状と副賞が塩見会員に授与された（受賞者による挨拶は懇親会場で）。

受賞者の言葉

【塩見由梨会員】

当論文は、ステュアート『原理』における〈交易・商業〉の原理について整理と検討を行なったものである。従来の研究では、商人や交易への注目は重商主義理論の限界とみられることが多かったが、本研究ではむしろ市場経済の「形成」過程を分析したからこそ構築できた独創的な成果と積極的に評価し、流通の機構と商業の不可分の関係を読み解く一つの考え方として提示した。本研究はなおも重要な論点を残しており、今後もさらなる検討を要するものであるため、今回の受賞を機により多くの方からご批判をいただければ幸いである。

経済学史学会 2018年度決算

収 入	予 算	決 算	差 額	備 考
会費	4,200,000	4,942,000	742,000	
『経済学史研究』売上	200,000	212,400	12,400	
『経済学史研究』広告料	150,000	250,000	100,000	
利子収入	1,000	105	-895	
雑収入(著作権協会等)	70,000	6,020	-63,980	
日本学術振興会助成金	3,900,000	3,900,000	0	
小計	8,521,000	9,310,525	789,525	
前年度繰越金	4,601,534	4,601,534	0	
収入合計	13,122,534	13,912,059	789,525	

支 出	予 算	決 算	差 額	備 考
1 大会費	350,000	310,760	-39,240	
2 部会補助費	150,000	114,977	-35,023	18年度未払15,000円含む
3 会議費	360,000	116,635	-243,365	18年度未払 4,343円含む
4 特別事業	30,000	0	-30,000	
5 『経済学史研究』編集・発行費	3,600,000	3,727,538	127,538	
6 大会報告集編集・印刷費	350,000	306,180	-43,820	
7 事務局費	160,000	58,805	-101,195	18年度未払 804円含む
8 会員配布物の関連費	800,000	547,868	-252,132	
9 学会ニュース等印刷費	220,000	201,800	-18,200	
10 選挙管理費	250,000	278,161	28,161	
11 センター費	1,000,000	1,136,788	136,788	
12 経済学会連合分担金	35,000	35,000	0	
13 JSJET管理費	500,000	509,610	9,610	
14 研究奨励賞賞金	50,000	50,000	0	
15 国際交流費	2,700,000	2,560,057	-139,943	18年度未払 25,080円含む
16 基金	800,000	800,000	0	
17 英文論集編集・発行費	500,000	250,000	-250,000	
18 若手育成プログラム	300,000	123,645	-176,355	
19 予備費	100,000	0	-100,000	
小計	12,255,000	11,127,824	-1,127,176	
次年度繰越金	867,534	2,784,235	1,916,701	
支出合計	13,122,534	13,912,059	789,525	

積 立 金	前期積立残高	予 算	決 算	当期積立残高	備 考
国際交流基金	2,500,000	500,000	500,000	3,000,000	
『経済学史研究』 発行基金	4,700,000	300,000	300,000	5,000,000	

経済学史学会2019年度予算案

収入	
会費	4,300,000
『経済学史研究』売上	200,000
『経済学史研究』広告料	200,000
利子収入	100
雑収入(著作権協会等)	10,000
日本学術振興会助成金	3,900,000
小計	8,610,100
前年度繰越金	2,784,235
収入合計	11,394,335

支出			
1	大会費	350,000	a 福岡大学(当年度) 200,000 b 北海道大学(来年度) 150,000
2	部会補助費	150,000	a 北海道部会 30,000 b 東北部会 30,000 c 関東部会 30,000 d 関西部会 30,000 e 西南部会 30,000
3	会議費	350,000	a 幹事会費 100,000 b 常任幹事行動費(5人分) 50,000 c 大会組織委員会 20,000 d 企画交流委員会 20,000 e 英文論集委員会 20,000 f 学会賞審査委員会(奨励賞) 70,000 g 学会賞選考委員会(学会賞) 70,000
4	『経済学史研究』編集・発行費	3,570,000	a 印刷費(PDF化経費等を含む) 1,300,000 b 編集委員会の関連費 450,000 c 編集システム 200,000 d 英文関連費 1,000,000 e J-STAGE関連費 620,000
5	大会報告集編集・印刷費	350,000	350,000
6	事務局費	180,000	a 代表幹事行動費 75,000 b 事務局行動費 75,000 c 通信費(振込手数料含む) 20,000 d 事務費 10,000
7	会員配布物の関連費	550,000	a 『経済学史研究』の郵送 400,000 b 大会関連・会員名簿の郵送 100,000 c 学会ニュースその他の郵送 50,000
8	学会ニュース編集費	100,000	・学会ニュース、大会案内 100,000
9	会員名簿印刷費	250,000	・会員名簿発行 250,000
10	庶務費	700,000	a 業務委託費 500,000 b 刊行物の発送手数料 200,000 c 編集委員会の業務代行 0
11	経済学会連合分担金	35,000	35,000
12	JSNET管理費	500,000	a JSNET管理費 200,000 b サーバー代金等のHP管理 300,000
13	研究奨励賞賞金	50,000	a 研究奨励賞本賞 0 b 研究奨励賞論文賞 50,000
14	国際交流費	2,300,000	a 海外派遣プログラム 2,000,000 b 招聘・派遣の関連費 300,000
15	基金	800,000	a 学会誌発行基金 300,000 b 国際交流基金 500,000
16	英文論集編集・発行費	250,000	250,000
17	若手育成プログラム	300,000	・会場費、交通費、歓迎会補助他 300,000
18	予備費	100,000	100,000
	小計	10,885,000	
	次年度繰越金	509,335	
	支出合計	11,394,335	

積立金(年度末見込み)

国際交流基金	3,500,000
『経済学史研究』発行基金	5,300,000

2019 年度各委員会の委員

(○印は幹事、*印は新規就任)

《『経済学史研究』編集委員会》

○古谷 豊(委員長)、生垣 琴絵、江原 慶*、高見 典和*、・田村 信一*、○福田 進治(事務局)、○牧野 邦昭*、柳 沢 哲哉*、米田 昇平

《大会組織委員会》

○伊藤 誠一郎(委員長)*、青木 裕子*、○江里口 拓*、○近藤 真司、○橋本 努、林 直樹*、松本 哲人、山崎 好裕、山本 英司

《英文論集委員会》

○佐々木 憲介*(委員長)、○池田 幸弘*、○江頭 進*、○大黒 弘慈*、○本郷 亮*

《企画交流委員会》

○中澤 信彦(委員長)*、石田 教子*、○上宮 智之(JSJET 管理)、笠井 高人(JSJET 管理)、久保 真、○原谷 直樹*、○野原 慎司*、南森 茂太(JSJET 管理)*、○吉野 裕介

《学会賞(研究奨励賞)委員会》

○佐藤 有史(委員長)、○井上 義朗*、○壽里 竜*、内藤 敦之、中村 宗悦*、結城 剛志*、米田 昇平

《経済学史学会賞選考委員会(任期1年)》

○出雲 雅志(委員長)*、○佐々木 憲介*、○堂目 卓生*、○新村 聡*、喜多見 洋*、

2019 年度経済学会連合評議員

有江 大介・川俣 雅弘

・学会ウェブサイト、メーリングリスト管理人

○上宮 智之、笠井 高人、南森 茂太、○中澤 信彦(責任者)

・事務局

○出雲 雅志(代表幹事)、事務局補佐: 佐藤 方宣(書記)、本吉 祥子(庶務)

各委員会報告

I 『経済学史研究』編集委員会

1. 2019年3月末に小林純・大黒弘慈・恒木健太郎・本郷亮の各氏が、さらに5月に出雲雅志・板井広明の各氏が退任されました。他方で編集委員を継続する生垣琴絵・米田昇平の各氏に加え、江原慶・高見典和・田村信一・福田進治・牧野邦昭・柳澤哲哉の各氏が4月に就任されました。事務局は福田氏が担当されます。なお、当面のあいだ、板井広明氏からウェブ投稿・査読システムの導入にともなう技術的な助言を受ける予定です。
2. 本誌 61 巻 1 号（7 月 25 日に刊行予定）には、論文 4 本、研究奨励賞受賞作講評、研究動向 2 本、Notes and Communications 1 本、書評 6 本が掲載される予定です。
3. 皆様からの積極的な論文投稿をお待ちしております。既に新しいウェブ投稿システムが稼働していますので、そこから投稿してください (<https://www.editorialmanager.com/jhet/>)。

(古谷 豊)

II 大会組織委員会

1. 第 83 回大会（福岡大学）は、140 名を超える参加者を得て、開催されました。会場校の関係者に感謝いたします。
2. 第 84 回大会は、北海道大学にて 2020 年 5 月 30 日（土）～31 日（日）の日程で開催を予定しています。報告募集の締切は 11/9（土）を予定しています。詳細はメーリングリストと学会ホームページで 9 月上旬までに告知しますので、それに従ってご応募ください。
3. 第 84 回大会の共通論題は「経済学史の未来：経済の理論と歴史から」とし、報告者として学会外から小野塚知二氏と瀧澤弘和氏をお招きすることになりました。学会からの討論者など詳細は今後詰めていきます。

(伊藤 誠一郎)

III 企画交流委員会

1. 若手研究者育成プログラム（Young Scholars Seminar=YSS）

本年度（2019 年度）開催予定の第 15 回 YSS は、日程の第一候補を 2019 年 11 月 9-10 日とし（11 月 9 日だけの 1 日開催になる可能性もあります）、会場の第一候補を関西大学千里山キャンパスといたします。内容については現在委員会内で検討中です。

また本年度は、年 1 回開催しているレギュラー YSS に加えて、International Adam Smith Society の大会（下記参照）と連携した番外編 YSS を 2020 年 3 月 17 日に東京大学本郷キャンパスで開催する予定です。内容については現在委員会内で検討中です。

2. 国際交流について

今年度最大の国際交流イベントは、International Adam Smith Society の大会を本学会、アダム・スミスの会（日本）との協賛で 2020 年 3 月 15-16 日に東京大学本郷キャンパスで開催することです。報告希望を 8 月 10 日まで受け付けております。多くの会員の発表・参加を期待いたします。詳細は大会ホームページ

<https://smithsociety.org/2020-tokyo/> をご参照ください。なお、Organizing Committee が特別に組織され、本学会からは有江大介・出雲雅志・田中秀夫・野原慎司・古谷豊・松本哲人の各会員が委員になっています。

また、国際交流の一環として、2019 年 5 月の ESHET 大会で、「若手教育」に関するラウンドテーブルが両学会合同で開催されました。久保真会員が司会を務め、Nathalie Sigot 氏、Kevin Hoover 氏、小峯敦会員が登壇者として各国・地域の状況を述べ、活発な議論を繰り上げました。

3. JSHET サイトおよび学会メーリングリストについて

学会サイトをリニューアルしました。学会メーリングリストを含めて、ウェブでの情報提供を強化していますので、メールアドレスを未登録の会員はぜひこれを機会に登録してください。国際発信のための海外派遣プログラムの運用は2019年度より本委員会ではなく常任幹事会にて行うこととなり、それに伴い委員を1名減としましたが、新しい学会サイトの管理に当初予想していた以上の労力を要することが半明し、サイト管理者をこれまでの2名から3名へと増員しました。そのため、委員会のメンバーは前期と同じ9名となりました。

(中澤 信彦)

IV 英文論集委員会

2019 年度前期の英文論集への出版補助の募集を行います。財政的な支援を必要とする、単一著者による著作・論文集あるいは共著論文集（経済学史関係のものに限定）の刊行をお考えの方は、積極的に応募されるようお願いいたします。共著の場合非会員である外国人研究者の参加は歓迎しますが、本学会会員を主体とした企画であることを要件とします。また補助は未支出の見込み必要経費の仮払いではなく、すべて領収書の提出に対して補助決定金額の範囲内で支払われ、応募・決定の次の半期のうちに実施されます。したがって応募の時点と出版企画の進行の時間幅に一定の制約が存在します。また、複数の執筆者による論文集の場合、学会からの補助の受給の事務的な作業には代表者が単独で当ることとします。

補助を希望される会員は以下の各事項を同じ順序で簡潔に記述したワードファイルの形式で、通常のページ設定なるべく 1-2 ページに収まるように作成した企画書を、2019 年 10 月 31 日（木）までに委員長にメールでお送り下さい。6 以外は必須とします。記入漏れがあれば審査対象になりません。

1. 著者名・所属（論文集の場合編者と執筆者全員、会員・非会員の別を明記すること。非会員は学会からの補助企画への参加にともなって、同時に入会手続きを取ることが望まれる）。
2. 書名と内容目次。各部分のおよその分量（語数）（論文集の場合は各部分の担当者名）。
3. 本書の概要と意義、類書があればそれらとの差異。
4. 原稿全体が揃う時期、英文校閲や Book Proposal の提出など出版に向けた手続きについての予定（Book Proposal 自体は送らないこと）。
5. 出版に要する経費の見積もり（内訳・使途、各項目の金額、支出（予定）時期）。
6. その他応募者が必要と考える申告事項。

応募案件は委員会にて審査の上、直近の幹事会での決定を経てすみやかに採否結果を通知いたします。積極的な応募を期待しています。

(佐々木 憲介)

V 学会賞（研究奨励賞）審査委員会

第17回経済学史学会研究奨励賞募集要項

第17回経済学史学会研究奨励賞の候補作を以下の要領で募集します。ふるって推薦をお願いいたします。

1. 推薦者（名誉会員も含む）ならびに被推薦者は、ともに学会員でなければならない。1人の推薦者が推薦できる被推薦著作物は1件以上とする（複数著作物の推薦も可能）。

2. 推薦対象著作物

(1) 刊行時40歳未満の会員の過去3年以内（2016年11月1日から2019年10月31日まで）に刊行された著作物（単著単行本に限る）のうち、会員から推薦のあった著作物および『経済学史研究』（以下『研究』）の書評対象となった著作物を本賞の審査対象とする。自薦を受け付ける。

(2) 刊行時40歳未満の会員の過去3年以内（2016年11月1日から2019年10月31日まで）に刊行された論文のうち、会員から推薦のあったものを論文賞の審査対象とする。自薦は受け付けない。

(3) 著作物は、ISBN番号が振られているものに限る。

(4) 論文は、ISSN番号が振られているものに限る。

(5) 『研究』第60巻2号、第61巻1号の書評対象とされた著書（単著）等の中で被推薦者の資格を満たす著者の著書（単著）を本賞の審査対象とする。

(6) 『研究』第60巻2号、第61巻1号に掲載された公募論文の中で被推薦者の資格を満たす著者の論文を論文賞の審査対象とする。

3. 推薦公募期間

『経済学史学会ニュース』第54号到着時から2019年10月31日（郵便等の消印有効）まで。

4. 送付書類等

推薦書、推薦理由書。書類は経済学史学会のHPから入手可能。

http://jsheet.net/modules/contents/index.php?content_id=21

対象候補作現物の送付は不要。

5. 送付書類等の送付先

郵送：〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-24-1 立教大学経済学部

佐藤有史研究室気付 経済学史学会学会賞審査委員会

またはE-mail: ysato@rikkyo.ac.jp

6. 受賞作品の発表ならびに授与式は2020年5月の第84回大会において行なう。

7. 審査結果は『経済学史学会ニュース』に公表し、その講評は『経済学史研究』に掲載する。

付記 この件に関する問い合わせ先は上記5. を参照してください。

(佐藤 有史)

VI 日本経済学会連合会

2019年度第1回評議員会が5月13日(月) 早稲田大学で開催された。

報告事項

1. 2019 年度第 1 次補助申請審査報告
 - 1) 外国人学者招聴滞日補助 1 件（アジア経営学会）
 - 2) 国際会議派遣補助 1 件（社会政策学会）
 - 3) 学会会合費補助 1 件（生活経済学会）
2. 『英文年報』第 39 号(2019 年 12 月発刊)について
3. 連合ニュース第 55 号 WEB 発行(別冊)
4. 退会 2 件（証券経済学会，実践経営学会）

協議事項

1. 2018 年度決算報告監査報告：承認
2. 2019 年度予算(案)・事業計画：承認
3. 第 5 回アカデミック・フォーラム開催企画について：承認
「学部で経済史をどのように教えるか」（仮題）
社会経済史学会／政治経済学・経済史学会（関連学会に共催を打診予定）
4. 正式加盟（日本地域経済学会）：承認
5. その他
次回の評議員会は 10 月最終月曜日開催予定：承認

(川俣 雅弘)

VII 経済学史学会賞選考委員会

規程にしたがって 5 名の委員が幹事会で選出されました（5 ページの委員一覧を参照）。今年度は 18 世紀以前を対象とする単著が候補となります。

(出雲 雅志)

会員異動 (2019 年 6 月 30 日現在)

会員数 533 名

会費別内訳 定職者 348 名、非定職者 147 名、院生 37 名

1. 退会者 (46 名)

池尾愛子、本間靖夫、渡辺淳志、真田哲也、川端実美、山下博、浮田聡、竹内洋、清水和巳、船渡川清、高橋一正、大矢野栄次、清水敦、齊藤佳倍、村越好男、高橋美弥子、嘉陽英朗、原島正衛、鍵主覇郎、原田善教、金子裕一郎、栗田健一、戸田宏治、菊池壮蔵、佐原昌弘、中村至朗、花田昌宣、佐藤宏、後藤洋、鈴木典夫、松嶋敦茂、山田信一、杉本昌俊、梅井道生、大和田寛、関功、高橋誠、長谷川貞之、森脇龍、大原淑子、江口友朗、鈴木平、笠原弘義、中倉智徳。

(「学協会サポートセンターからデータを引き継いだ際に、会員数の数字が第 53 号でお知らせした数字と若干異なることが判明しました。本号の数字が会員ページのデータ通りとなります。——前事務局)

2. 新入会員 (5 名) (院生の記号「D」は博士後期課程、「M」は修士課程)

氏名 (カナ)	所 属	メール	推薦者	研究テーマ
中村えい子 (ナカムラ・エイコ)	同志社大学経済学研究科 (M)		西岡幹雄 仲北浦淳基	資本主義型経済の共存可能な共同型経済
和田美憲 (ワダ・ヨシノリ)	同志社大学経済学部		野原慎司 笠井高人	アダムスミスの経済・宗教思想の構造
加藤真琴 (カトウ・マコト)	明治大学政治経済学研究科 (D)		高橋信勝 奥山誠	W. C. ミッチェルの景気循環論
小平武史 (コヒラ・タケシ)	東京大学経済学研究科 (D)		野原慎司 石原俊時	ケインズ研究
日臺 健雄 (ヒダ イ・タケオ)	和光大学経済経営学部		江原慶 大黒弘慈	国家資本主義をめぐる経済思想

3. 属性変更 (53 号以降に通知のあったもの)

※ ウェブ版では削除。

部会報告

北海道部会

2018 年度第 2 回部会

日時：2018 年 12 月 8 日（土）15:40-17:00

場所：北星学園大学

参加者：7 名

・報告（15:40-17:00）

小林大州介（北海道大学経済学研究院博士研究員）

「シュンペーターの政策的立場」

シュンペーターの経済政策に対する消極性は、彼の著作の端々に見て取ることができる。彼の 1908 年の最初の著作、『理論経済学の本質と主要内容』では、彼は古典派経済学者が例えば“自然”という語に託したようなあいまいな定義や(Schumpeter 1908, 訳, 上, 89)、また経済学における“個人主義”的な体系に対する批判などが主に政策的見地から行われていることを批判し、ワルラス理論のように均衡体系を中心とする理論が純粋な経済理論であり、科学的なプログラムであることを強調したのである。彼は科学としての経済学を志向していた。

しかし他方で 1919 年に社会主義政権のカール・レンナー内閣に財務相として入閣するなど、政策立案に関与した経歴もある。カール・レンナー内閣の入閣に当たっては、戦後のひっ迫した経済を救済するために内閣が要求する“財産税”の遂行を受け入れた。シュンペーターの経済学は様々なアンチテーゼから成り立っているが、その中でも最も特徴的なのが、マルクスの階級闘争への反論として出された、「社会階級論」である。社会階級論において彼は、競争的な個人企業の時代、そして巨大化・独占化した企業による資本主義、「トラスト化した資本主義」の世界における、家族の地位の変化を考察する。そして彼は、マルクスが想定するような固定化した階級間の争いは無く、階級内、もしくは階級間の地位はある程度流動的なので、労働者が革命に訴える必要はないと考えた。

彼によると重要なのは階級ではなく、個人や家族の環境への適応能力である。しかし、恐慌のような大きな変動が生じた場合、適応的な企業まで淘汰されないよう、積極的に融資を行い、他のものに対しては市場による淘汰に任せるべきであると考えた。

シュンペーターは産業主義的であるとかレッセ・フェール論者と誤解をされるが、彼はその経済状況に合わせて、危機的な状況下では失業者救済にも反対はせず、またカール・レンナー内閣で見たように、財政的な危機にあれば増税にも賛成した。しかし彼の議論で貫徹しているのは、経済発展への志向である。本論ではこれを単純な産業主義とはとらえない。これは、どんな階級にいるものでも、新しいことをなすという困難を克服することによって、道が開けるといふ、本論で展開したようなある種の機会均等主義に類似した思想に由来しているのではないかと考える。

（楠木 敦）

東北部会

2019 年度例会

日時：2019 年 5 月 25 日（土）13:20-17:00

場所：「コラッセふくしま」

参加者：14 名

・第 1 報告（13:20-14:20）

塩見 由梨（東京学芸大学）

「ジェームズ・ステュアート商業論研究」

司会：古谷 豊（東北大学）

・第 2 報告（14:30~15:30）

福田進治（弘前大学）

「日本のリカード研究の独自性と多様性」

司会：下平 裕之（山形大学）

・東北部会開設 40 年記念講演（15:40~16:40）

菊池壮蔵（福島大学・名）

「東北部会 40 年の活動をふり返って」

ジェームズ・ステュアート商業論研究

塩見 由梨

塩見報告「ジェイムズ・ステュアート商業論研究」は、報告者の士論文の内容についての発表である。報告では、ステュアート『経済の原理』の内容検討を通して、ステュアート理論に関する 3 つの点が主張された。第 1 に、ステュアートの考える「商業・交易」とは、商人同士の競争関係のことであり、この商人間の競争が市場経済のメカニズムを生成するというのが商業論のメインテーマとなっていること。第 2 に、『原理』にはこうした商人の行動原理や経済合理性を理解するための個別主体レベルでの利潤概念のほかに、個別主体の経済活動の結果を公共の観点から評価するための為政者のための利潤概念が提起され、結果として 2 つの利潤論が展開されていること。第 3 に、2 つの利潤論に合わせて 2 つの経済のつり合い balance が論じられていると解釈することができること。また、以上 3 点の総括として、商業論に注目してステュアート『原理』を再検討することによって、従来はセットあるいは表裏の概念と考えられてきた「譲渡利潤（勤労利潤）」と「相対的利潤（絶対的利潤）」、「均衡」と「不均衡」の関係を見直し、私人レベルの市場経済メカニズムの分析と為政者レベルの政策方針に関する議論として整理可能であることを示した。

こうした報告に対して、主に次の 4 点のコメントが挙げられた。第 1 に、交易の効果としての「時間の短縮」の意味について。第 2 に、卸売市場と消費市場をわけるというステュアートのアイデアについて。第 3 に、現代の「小売り」と『原理』執筆当時の「小売り」のシステムの違いについて。第 4 に、為政者の利潤という発想と貴族としての所領経営の考え方の関係についてであった。

日本のリカード研究の独自性と多様性

福田進治

スラッファ編『リカード全集』刊行後、羽鳥卓也、

中村廣治、千賀重義を始めとする日本のリカード研究者たちは、スラッファのリカード解釈を批判しながら、初期リカードの利潤理論、リカードの労働価値理論、リカード『原理』の理論構造等について、独自の研究成果を挙げてきた。彼らは綿密な文献検証に基づき、リカードの歴史的本来の姿を明らかにしようと努めてきた。他方、菱山泉はスラッファの貢献を評価する立場からリカード『原理』を検討し、スラッファの理論を「リカード理論の現代版」とした。森嶋通夫はスラッファを批判しながら、一般均衡理論の枠組みを用いてリカードの経済学を再構成しようとした。菱山と森嶋のリカード解釈は対立するが、ともにリカードの経済学の再構成を通して、その現代的意義を評価することを目指してきた。

こうしたリカード研究の方法について、羽鳥・中村・千賀は現代的意義を評価するためにこそ、歴史的事実を追求するという立場を取っていた。そして、そのために『原理』のみならず、さまざまな資料文献を綿密に検討することを通して、リカードに「内在」し、リカードの「実像」を明らかにしなければならないと主張した。これに対して、菱山・森嶋は現代的意義の評価を歴史的事実の追求よりも優先するという立場を取っていた。彼らは現代経済学のツールを用いてリカードの経済学を再構成し、ときにはリカードの歴史的本来の姿を修正することを厭わなかった。

欧米のリカード研究と比較したとき、羽鳥・中村・千賀のような歴史的事実の追求を重視する立場の研究者たちが主流派を形成したことは、日本のリカード研究の独自性であるといえる。同時に、菱山・森嶋の研究のように、主流派と異なる立場の研究たちの顕著な貢献が見られることは、日本のリカード研究の多様性であるといえる。欧米では、異なる立場の研究者たちの間で激しい論争が繰り広げられてきたが、日本では、欧米に見られるような対立や論争は生じなかった。このことも日本のリカード研究の独自性といえるかもしれないが、そこには功罪両面があるように思われる。

（岩本 吉弘）

関東部会

2018 年度第 2 回部会

日時：2019 年 3 月 27 日（水）13:30 -18:00

場所：立教大学

参加者：18 名

・報告（13:35-14:45）

池尾 愛子（早稲田大学）

「田中王堂のプラグマティズムと二宮尊徳研究：国際二宮尊徳思想学会第 8 回曲阜大会に参加して」

司会：中村 宗悦（大東文化大学）、討論者：見城 悌治（千葉大学・非会員）

・シンポジウム（15:20-18:00）

Symposium: Shinji Nohara's *Commerce and Strangers in Adam Smith* (2018)

第 1 討論者：只腰 親和（中央大学）

第 2 討論者：新村 聡（岡山大学・名）

第 3 討論者：佐藤 有史（立教大学）

著者リプライ：野原 慎司（東京大学）

司会者：有江 大介（横浜国立大学・名）

田中王堂のプラグマティズムと二宮尊徳研究：
国際二宮尊徳思想学会第 8 回曲阜大会に参加して
池尾 愛子

田中王堂（1867-1932）は 19 世紀終盤にアメリカに 8 年以上滞在し、シカゴ大学大学院においてプラグマティストのデューイ（John Dewey: 1859-1952）の指導を受けた。王堂は帰国後、福住正兄著『二宮翁夜話』（1893）を読み、尊徳に、プラグマティズム（実践、実験を含む）、功利主義、中庸、個人主義、重農主義等を見出し、『二宮尊徳の新研究』（1911）を出版した。その再版『ヒューマニスト二宮尊徳』（1948）には石橋湛山が序文を寄せた。そしてデューイは 1919 年から 2 年以上中国に滞在し、中国語名「杜威」をもつ。ここまでは、国際二宮尊徳思想学会第 8 回大会（曲阜師範大学、2018 年 10 月）でも「J. デューイの実用主義と田中王堂の二宮尊徳研究」と題して発表した。王堂は幸福の哲学・経済思想の伝統においてスミスを読み、『象徴主義の文化

へ』（1924 年、169 頁）では、「アダム・スミスは、これより将に科学が産業の方法を革命せんとしていた初頭に立ち、未来において科学が人間の幸福の増進に貢献することの甚大なるべきを予想して、歓喜と希望とに満ちながら、あの『国民の富』の一卷を著わした」と論評した。1990 年代、私は同書を理解するために英語母語話者達と議論し、『諸国民の富』の英語はキリスト教を深く帯びて難しすぎ、「アダム・スミスは日本の近代経済学の基礎ではあり得ない」と確信して、日本の近代経済学・経済思想の基礎を探究した。*A History of Economic Science in Japan: The Internationalization of Economics in the Twentieth Century* (Routledge, 2014) は、キリスト教のない世界でも経済思想・経済学が展開し得たことを示す本として理解していただきたい。「田中王堂のプラグマティズムと経済思想」（『アジア太平洋討究』第 35 号、2019 年 1 月刊）参照。

Symposium: Shinji Nohara's *Commerce and Strangers in Adam Smith* (2018)

第 1 討論者

只腰 親和

野原慎司会員の本書は、氏自身二冊目の単著で、しかも今回の書物は内外に研究の分厚い蓄積のあるアダム・スミスに果敢に挑んだ成果として敬意を表したい。内容は、スミスの道徳、政治（法）、経済の各分野の主要ないくつかの論点を取りあげたものと言えるが、私は今日の最初の討論者として大まかなコメントをさせて頂く。

私見では、本書の主たる鍵概念は、stranger, globalization, commerce の三つであると考え。興味ある問題枠組みであると思うが、それぞれについて私なりのコメントをしたい。

まず stranger であるが、著者はスミスによる stranger の用法として、1) 外国人、2) 社会的・文化的背景の違う人、3) 匿名社会の人、4) （血縁者のような）親密な関係の人のように、多様な用法があることを指摘している。しかし、著者がスミスにおける stranger 概念の重要性を主張しようとするのであれば、このよ

うに広範な用法はかえって stranger 概念の独自の意味を減殺するのではないか。

globalization は現代の問題でありそれをスミスと結びつけたのは興味ある設定だが、やはりそれを学術用語として用いるのであれば、ことばの定義や時代的限定を明確にすべきであると思う。著者は、「商業社会はグローバリゼーションの時代である」(p. 5)としているが、有名な『国富論』1 篇 4 章の「商業社会」でスミスはどの程度グローバリゼーションを意識していたであろうか。

commerce について著者は本書 8 章で、スミスの貿易論を商人主導の貿易論と主張している。たしかに貿易に直接、携わるのは商人だが、スミスが貿易の基本的効用と考えるのは、貿易（輸出）が国内において資本の回転をどれほど促進するか、すなわち生産の観点ではないか。農業—工業—商業という富裕の自然的進歩論から見ても、スミスが商人を重視していたとするのは再考の必要があるのではないか。

第2 討論者

新村 聡

本書は、1 章で課題と方法、2 章で時代背景について述べ、3 章と 5 章前半で『道徳感情論』、4 章で『法学講義』、5 章後半～8 章で『国富論』を考察して、9 章で結論を述べている。「商業と見知らぬ人」をキーワードにスミスの主要著作を再解釈して、グローバリゼーションの時代を生きたスミスという新鮮なスミス像を提示することに成功している。スミスの原典を独自の観点から大胆に読み込み、各領域で斬新な新解釈を提起して読者に知的刺激を与えている。たとえば道徳の一般規則の規則性と不規則性の関係としての再解釈（5 章）、貨幣需給の長期動態にもとづく貨幣価値変動論（6 章）、マーシャルの部分均衡分析と対比したスミスの部分均衡動学（7 章）、通説的な供給重視の国際貿易論に対する需要主導の国際貿易論の提起（8 章）などである。膨大なスミス研究文献を渉猟するだけでなく周辺領域の文献も広く参照しており、国際貿易統計（1 章）、旅行記と宣教師報告（2 章）、ロールズとコミュニタリアンの論争（3 章）、スコットランド啓蒙思想の封建社会論争（4 章）、18 世紀市場に関する経済史文献（7 章）

などにも触れている。

本書に対する大きな疑問点は、スミスの重商主義批判にほとんど言及していないことである（あまりに自明のことだからかもしれない）。18 世紀のグローバリゼーションを論ずるときには、重商主義的グローバリゼーションとスミスの自由主義的グローバリゼーションとの対抗関係をもっと重視するべきと思われる。また共和主義的文献への言及がわずかで、スミスの近代文明社会批判や長子相続法と限嗣相続法への批判がほとんど論じられていないことにも物足りなさを感じた。

第3 討論者

佐藤 有史

スミスにおける stranger 概念の意義を問い直そうという本書の姿勢には心より共感する。そのうえで、本書第 1 章から 5 章までの TMS を中心とした議論と、第 6 章から 8 章までの WN を中心とした議論の接合の仕方に少し難を感じた。その一つの原因が、前半における stranger 概念の語義の整理の仕方と、後半ではこの概念が外国貿易論における「外国（人）」問題のみに使われているという取扱い方とに由来することは間違いのない。

J. R. オテソンが強調したように、TMS の道徳理論には何がしかのマーケット・モデルが前提されている可能性がある。例えば、不特定多数を相手にする「市場取引モデル」と、特定の相手のみとの「相対（あいたい）取引モデル」の対比のようなものがそれである。前者は strangers が行きかう場での共感と道徳性が、後者は friends or acquaintances との交わりの場で形成される共感が関わるというように。スミスの stranger 概念を取り上げるのなら、市場取引モデルに特有の共感モデルを明確にした水田洋先生の画期的解釈について一言あるべきでなかったか。

また WN 解釈に stranger 概念を生かすとしたら、例えば価値論においても、「見知らぬ人々」視点が、客観的な生産費理論に向けた交換価値論をスミスに指向させたと言えないか。そもそも、主観によってではなく、数・重量・尺度をもって社会を説明し記述しようとした W. ペティが最初に「自然価格」を言い始め、スミスはその伝統に従っているのである。無理にスミスをマー

シャルに結び付ける必要はない。そしてマーシャルは、スミスよりはむしろリカードウをこそ意識していた。

最後に、著者はリカードウの比較優位理論を「絶対優位論」と混同するというミスを行っていないか。さらにリカードウ貿易論とスミス貿易論を「生産重視」と「需要重視」とに区分するのは適当でない。

著者リプライ

野原 慎司

Shinji Nohara, *Commerce and Strangers in Adam Smith* (Springer, 2018) に対して、只腰親和氏からは、strangers 概念の曖昧さ、globalization の定義づけの必要性、スミスが商人を重視していたとの説の再考の必要が指摘された。それに対してリプライされたのは、strangers の多義性を意図的に生かしたのが本書であること、globalization は大航海時代以来進行してきたヨーロッパの世界への貿易・植民による進出を指していること、生産の観点では今回の本では分析視角として重視しなかったが、そのことは生産論を軽視していることを意味していないことであった。

新村聡氏からは、本書が重商主義へのスミスの対抗を軽視していること、グローバリゼーションがあたかも肯定的なものであるかのように捉えられており、グローバル化の負の側面や、それが政治的対立を伴うことが十分に捉えられていないのではないかと指摘を受けた。これに対して、本書はグローバル化の負の側面も扱うものであるが、政治的対立の側面はもう少し考究を深めることが必要なことがリプライされた。また、新村氏から共和主義や長子相続法への言及の乏しさが指摘されたが、それは分析視角上の選択であり、それらの重要性がないことを意味しないとリプライされた。

佐藤有史氏からは、strangers 概念が、スミスの経済学における市場取引原理を説明する際に十分に用いられていないのではないかと、および市場取引と相対取引での取引の場の違いについて指摘を受けた。これに対して、その点の考察を今後さらに進める必要がリプライされた。また、価値論における「見知らぬ人」の関係性について質問を受けた。これに対して、労働価値説および生産費説は、本書の視角からは外れてしまったが、それらの問題はこれまでの研究史において論じ尽くさ

れてきた問題であるが故に、本書ではそれとは異なるスミス思想の側面に焦点を当てたが、それはそれらの問題が重要ではないことを意味しないこと、スミス思想は多面的であり、特定の側面に焦点を当てればその他の側面が影となってしまうことが有り得ることがリプライされた。(佐藤 有史)

関西部会

第 175 回例会

日時：2018 年 12 月 15 日（土）15:00 -18:00

場所：名古屋経済大学名駅サテライトキャンパス 10 階
ホール

参加者：15 名

合評会 マーク・A・ルッツ、馬場真光訳『共通善の経済学—人間性重視の社会経済学・二百年の伝統』晃洋書房、2017 年

評者 1 堂目卓生（大阪大学）

評者 2 桑田学（福山市立大学）

訳者リプライ 馬場真光（ヴェリタス総合研究所）

全体討論

第一評者からのコメント

堂目 卓生

著者によれば、本書の目的は「世界をふたたび常識にもとづく思考と調和したものに作りかえ、人間の品性や良識ある行動と共鳴するものにする手助け」（368 頁）をすることにある。この目的のため、著者は、シスモンディを起点とし、ラスキン、ホブソン、トーニー、ガンジー、シューマッハーらによって受け継がれた「社会経済学」の系譜を示し、その継承、発展を主張する。社会経済学は、「共通善の経済学」と呼んでもよく、「共通善」とは、「物質的充足」と「人間の尊厳の尊重」が構成員全員に広く行き渡ることを意味する。

主流派経済学と比べたときの社会経済学の主な特徴は、(1) 選好関数にもとづいて行われる個人の合理的選択によって市場の状態が決定されること、(2) 市場での出来事が社会における分配状態、生態環境、制度、社会規範、人間関係などを変えること、(3) こうした社会

における変化が個人の価値観に影響すること、(4)個人における価値観の変化は選好関数を変えること、これらすべてを考慮に入れる点にある。主流派経済学が扱うのは(1)のみであり、(2)～(4)は考慮されない。

一見すると、社会経済学の方が主流経済学よりも包括的かつ実践的であるように見える。しかし、人間知性の限界を考えるならば、全体のうち、まず考察する範囲を区切り、「他の事情を一定とするならば」(ceteris paribus)という仮定のもとで分析し、総合する方法が自然ではないか。マーシャル以後の主流経済学はこの方法をとって精密科学としての道を歩んできた。問題は、他の事情一定の仮定を置くこと自体にあるのではなく、そうした仮定を立てていることを忘れ、導かれる結論が普遍的妥当性をもつものと錯覚し、仮定の範囲をそれ以上広げようとしなくなることにある。主流派が陥りやすい錯覚を指摘し、目を開かせ、仮定を広げさせ、より現実的な結論を引き出すように導くこと——これが「異端」と呼ばれる(あるいは自称する)学者の役割であるように思う。本書の原著は20年前に書かれたものであるが、新鮮さを失っておらず、現代の主流派経済学者の目を開くアイデアで満ちている。実務家出身であるにもかかわらず、本書の重要性を洞察し、見事な翻訳を成し遂げた訳者に敬意を表したい。

第二評者からのコメント

桑田 学

マーク・ルッツ著『共通善の経済学』は、「人間性重視の社会経済学」の学説史研究であると同時に、広義の「経済学批判」への入門書としても読むことができる。社会経済学の思想的源流(シスモンディ、ラスキン、ホブソン)とそこから派生した経済思想・経済学批判の多様さだけでなく、現代の時代文脈に引き付けてその意義を積極的に論じ直そうとした点に、本書の特徴と面白さがある。そのうえでコメントでは、社会経済学の伝統・系譜の描き方に焦点を絞り、現代の「経済学批判」としての本書のスタンスそれ自体について問題提起を行った。とくに問題としたのは、本書におけるhumanisticな経済学が「狭すぎる」のではないかという点である。ヒューム、スミス、J.S. ミル、マーシャル、ピグー、ケインズに通底する「モラル・サイエンスとし

ての経済学」への関心は本書では驚くほど希薄である。現代の主流派経済学が、上記のビッグ・フィギュアの知的伝統の上に立つものであるとしても、いわゆる経済学の「制度化」のなかで意識的に削ぎ落され、忘却されたものは計り知れない。しかし本書の叙述では、主流派経済学(マルクス派も含め)の知的伝統はきわめて貧困・陳腐なものとして表象・批判される結果となっている。これは、経済学/反経済学、主流/反主流という素朴な二項対立を煽るだけでなく、経済学という知の複雑さに向き合ってきた経済学史・思想史研究の意義を薄め、現在の「制度化された経済学」のあり方に懐疑的な経済学者にとっても望ましくない帰結となりうる。むしろ経済学の歴史が、経済学内外からのたえざる批判とともにあった事実を踏まえるなら、資本主義/市場経済の「道徳的条件」や経済学における「人間像」、「競争」の意味、経済学の「方法論的基礎」などをめぐる論法の歴史の変容や論争の複雑さに焦点を合わせる方法が、「経済学的知」の歴史的な豊饒さをとらえ直すうえでも望ましいのではないだろうか。こうした率直な疑問に対し、翻訳者の馬場真光会員から真摯なリプライをいただき、フロアからも様々な意見を頂戴した。評者にとっては異端派あるいは反主流派経済学の思想史研究のあり方や意義を再考するたいへん良い機会となった。

訳者リプライ

馬場 真光

日本語版刊行に際してデータ更新がなされたとはいえ、当初発表後約20年を経た本書の意義を認め、今回合評会で取り上げて頂いたことに、訳者として深く感謝申し上げます。

本書の内容につき、二名の合評者により的を射た概観とその意義の評価さらに異なる側面からの批判的分析が示された点については、いずれも同感する。本書において、著者ルッツは、(1)「共通善」の概念を基礎におく人間性重視の社会経済学(論者)の歴史的系譜、(2)現代の人権哲学の援用による主流派経済学の理論的批判、(3)現代の世界が抱える3つの代表的課題に対する処方原理を、自身の研究の集大成として取りまとめているが、本書全体の意義や立論の特長を理解しつつ、学

説史の記述における不足や、主流／反主流の構造が強調されているのではないかと懸念等は、おそらく参加者の多くに共有されたものであろう。

一方、理論経済学と経済思想史をおさめた著者自身、このような不足（言い換えれば難しさ）についての認識が皆無であったとも思われない。にもかかわらず、著者があえてこのような野心的な書物を著そうと試みた背景には、「今はもう、既存の枠組みからいわば飛び出して思考をはじめるとき」（日本語版の序）との言葉に見られるように、本書を学術的な成果としてだけでなく、現在の世界が抱える社会的課題の現実的解決のための「材料」（同）として、学界のみならず世間に問おうとした彼の強い情熱が感じとられる。その意味では、本書に対する最終的な評価は、後日、それが今後の経済活動上、政策上の思潮にどれだけ積極的な影響を与え得たかという観点からもなされることが、本来ふさわしいものとなる。

主流派理論が基礎におく合理的経済人像を厳しく批判する社会経済学の立場は、行動経済学で実証された人間の限定合理性との関連を想わせるが、著者ルッツが強調する人間の「高次の自己」（「低次の自己」と並存する人間の本性）の認識が共有されない限り、両者の間の相互交流ないし融合の可能性は、残念ながらおそらくは乏しいものと思われる。（牧野邦昭）

西南部会

第126回例会

日 時：2018年11月24日（土）13:30 -18:00

場 所：長崎大学

参加者：13名

・第1報告（13:30-14:30）

仲北浦 淳基（同志社大学）

「D. H. ロバートソンにおける分配論——1950年代の講演を中心として」

・第2報告（14:35-15:35）

吉野 浩司（長崎ウエスレヤン大学・非会員）

「利他主義社会学の創造——P. A. ソローキン最期の挑戦」

・第3報告（15:50-16:50）

荒井 智行（下関市立大学）

「ヘイリベリ・カレッジにおける経済学講義の制度化と『インヴェラリ

ティ・ノート』の再考——India Office Recordの資料分析を手がかりに」

・第4報告（16:55-17:55）

山崎 好裕（福岡大学）

「需要における外延と内包——マルサスと哲学および数学」

D. H. ロバートソンの分配論

——1950年代の講演を中心として——

仲北浦 淳基

本報告では、D. H. ロバートソンが1950年代に行った2つの講演を分析対象として、彼の分配論を検討した。その際、彼の経済学に通底していると考えられる2つの概念——普遍的な「努力」概念と多層的な「産業」概念——が分配論にも表れているか、という点に着目した。

「努力」概念とは、人間の心身的な負担を表す普遍的な概念である。人間は「努力」の投下によって生産活動を行う（供給）。他方、「努力」の動機はどれだけ消費したいかという欲求に基づく（需要）。次に、「産業」概念は、ロバートソンのマクロ経済観に直結している。彼は、個人の分析から出発し、個人の集合である企業・産業へと拡張し、その先に国民経済を展望するという方法を採った。この際、彼にとって重要だったのが労資の「調和」である。

第一の講演は、1954年にロンドン大学のスタンブ・メモリアル・レクチャーで行われた“Wage”である。この講演では、ロバートソンの多層的なマクロ経済観と「調和」の観点が特徴的であった。まず、ロバートソンは、労組による人為的な賃金の引き上げを戒める。それは、資本家・企業家による事業を抑圧するからであり、そうなれば、事業は縮小してさらに失業者が増大するからである。こうして、彼は、労資の協調という観点から、諸産業間に賃金格差が存在するとしても、人為的な賃金引き上げをすることに否定的な立場をとったので

ある。

第二の講演は、1957年にイングランド銀行で行われた“Wage Inflation”である。この講演では、ロバートソンの「努力」概念が強調された。彼は、戦後社会主義下で実施されていた過度な財政政策や完全雇用政策を、物価高騰の原因だとして批判した。さらに、労組の力が強ければ、インフレは賃金をも騰貴させるだろう。これに対して、ロバートソンは、物価と賃金を連結させるのではなく、生産性と賃金を連結されるべきだと主張した。労働の生産性が向上すれば、生産量が増大するため、財貨の価格は下落する（デフレ）。そうすれば、貨幣賃金が一定であっても実質賃金は上昇する。彼は、この「労働本位」という主張を「マーシャルの教え」と位置づけて、これに回帰すべきだと主張した。これこそ、彼の「努力」概念を重視した主張と言えるだろう。

利他主義社会学の創造

——P.A. ソローキン最期の挑戦——

吉野 浩司

P.A. ソローキン (Pitirim A. Sorokin, 1889-1968) は20世紀の世界を代表する社会学者である。本報告の目的は、そのソローキンが晩年になって提唱した「利他主義社会学」を、彼の最期の挑戦であり、最大の社会学の遺産である、と位置づけることにある。彼の言うところの「利他主義」とは、「個人が他人の幸福のために、自分の正当な利益をすすんで犠牲にすること」と定義されている。そうした考え方に基づく利他的行為は、どのようなメカニズムで生まれてくるのか、どうすれば普及させることができるのか。それが利他主義社会学のねらいとするところである。

1950年代に彼がそうした学問を提唱したのは、彼の時代認識と大きく関わっている。それは現代が、過剰に個人の利益を重んじる感覚的文化心性 (Sensate cultural mentality) の時代であり、その結果が戦争や紛争という社会現象を引き起こしているというものである。他方、感覚的文化心性は、性革命や価値相対主義、利己主義、あるいは生きる意味の喪失といった現象をも表面化させる。そうした危機の時代を乗り切るための「処方箋」が利他主義であった。

利他主義社会学はソローキンの意図に反して同時代の社会学の中では受け容れられなかった。ソローキン自身も、そうした社会学の現状に対する不満から、同時代の社会学への痛烈な批判を展開した。そのため彼の社会学は、長きに渡り敬遠されていた。1990年代の終わりごろから、ようやく再評価の機運が訪れた。それには2つの理由が考えられる。

遠因としては冷戦終結後、地域紛争やテロリズムが頻発するようになった社会情勢が挙げられる。グローバルな多文化共生社会においては、どれだけ優れているとされている価値観であっても、それを一方的に相手に押し付けることはできない。多様な価値観を許容するような、新たな思考と社会システムが求められるようになった。

近因についていうと、ソヴィエト連邦解体後のロシアで、ロシア革命前の学問と思想の見直しが強まったことが挙げられる。ソローキン再評価の機運は、ロシアで盛り上がり、ついでアメリカ、ヨーロッパへと飛び火するように展開していった。利他主義社会学に関してはそういう側面が、いっそう強い。

こうしてソローキンの利他主義社会学は、今再び世界の社会学の中で再評価されるようになった。

ヘイリベリ・カレッジにおける経済学講義の制度化と『インヴェラリティ・ノート』の再考

——India Office Record の資料分析を手がかりに——

荒井 智行

本報告は、東インド・カレッジ（以下、カレッジと略記）における経済学講義の制度化のプロセスとマルサスの経済学講義の特徴について、主に大英図書館所蔵のIOR (India Office Record) の資料を用いながら可能な限り明確に示すことを目的とした。本報告の前半では、1806年のこのカレッジの開学前に、学内の多くの権限を有するカレッジ委員会によって記された年代別の報告書の比較・検討を行った。その結果、この経済学講義の制度化にあたっては、インドとブリテンとの政治・経済関係を理解することが一貫して特に重要な課題とされていた。これは、Keith Tribe 氏の研究の中

で参照された、両国のそれらを学ぶ重要性について記された IOR の資料以外にも多く記されていた事実を裏付けるものであった。

マルサスの経済学講義が、John Pullen 氏によって発見された Inverarity Notes に見られるように、主としてスミス『国富論』の解説（特に租税論）であったというこれまでの多くの見解は間違いないだろう。本報告では、この点を認めつつも、マルサスが経済学講義において、インドとブリテンとの政治・経済に特別な意味を持たせて講義していたのではないかと考察を試みた。Inverarity Notes において、インドも含めた新植民地に関する質問の数は、租税・地代の質問や穀物貿易も含めた外国貿易に関する質問と比べても多い部類に入る。このことは、Inverarity Notes において、マルサスがインド経済にいかに注意を払っていたかを示している。

マルサス講義におけるインドへの注目、自らが経済学上の主要テーマに掲げた地代論がインドの封建的な地代問題に関わるだけでなく、東インド会社におけるインド統治の費用負担ならびに債務の増大とも不可分に関係していた。そしてインド経済へのマルサスの関心は、両国の政治・経済関係の教育を重んじたカレッジ委員会によって作成されたカレッジの経済学講義の計画の内容にも一致する。マルサスは、アダム・スミスとは異なり東インド会社の独占を擁護し、繰り返し生じたカレッジ暴動やグレンヴィル卿のカレッジ批判においてカレッジの教育政策を執拗に擁護した。このことは、マルサスがカレッジに忠誠心を尽くした点とも関連し、彼が同委員会によるカレッジの経済学講義のカリキュラムの意向に従うこととも関係するのではないかとこれを論究した。最後に、Inverarity Notes に見られる政治学に関わる質問や人口と貧民救済の質問についても言及し、マルサス講義の研究の意義を明示した。

需要における外延と内包

——マルサスと哲学および数学——

山崎 好裕

マルサスでもアダム・スミス同様、供給量が一次元的であることに変わりはないのだが、需要量では「外延」と「内包」とが区別されるようになる。「外延」としての需要は文字通り外延量であって、やはり外延量であって所与の供給と一致する。だが、マルサスはここに留まらず、市場価格が変化する過程を説明することが試みる。そのために「内包」としての需要が定義されなければならなかった。「外延」・「内包」はイマヌエル・カントなど哲学でおなじみの概念であるが、ライプニッツの微分学で無限小量と同義で使われ、マルサスの用法はこちらから来ていると推測できる。マルサスの定義では、「内包」としての需要は需要者が支払いたいと思ひ、支払うことのできる犠牲ということになっている。この意味は、需要者が欲望を満たすための追加的手段にどれだけ払えるかで需要の限界的な強度を測定できるということである。これは需要の「内包」が内包量ということであり、また、微分量が意識されているということである。需要の「内包」が強いときに市場価格は高く、弱いときに市場価格は低い。「外延」としての需要と「内包」としての需要は反対方向に動くと考えるのが自然である。需要の「外延」が大きくなると、需要の「内包」は弱くなる。需要の「外延」が小さくなると、需要の「内包」は強くなる。これは右下がりの需要曲線に他ならない。マルサスがヒントを得たと推測されるステュアートでは、需要の大小は需要量=供給量を決定するものであり、価格の決定には関わってこない。ステュアートが価格を決定すると考える需要の高低は、競争の相対的な強度のことである。供給者間の競争に比べて需要者間の競争が激しいとき、需要が高いと言い、供給者間の競争に比べて需要者間の競争が穏やかなとき、需要が低いと言うのであった。ステュアートではこのように市場の把握がかなりメカニカルであり、それがマルサスによって外延量・内包量の概念を用いて理論的な深化を見たと考えられるのである。（平方裕久）

国際学会情報

開催日時を基準として、最小限の情報を掲載しています。募集や参加などをすでに締め切ったものもあります。最新の方法については URL などで確認ください。

- **ESHET (European Society for the History of Economic Thought)**

The 23rd Annual Conference, University of Lille, Lille, France, 23-25 May 2019.
<http://www.eshet.net/index.php?a=23>

- **HES (History of Economics Society)**

The 46th Annual Conference, Faculty House, Columbia University, New York, USA, 20-23 June 2019.
<https://historyofeconomics.org/hes2019/>

- **STOREP (The Italian Association for the History of Political Economy)**

The 16th Annual Conference, Università di Siena, 27-29 June 2019
<http://www.storep.org/wp/en/storep-2019-siena-june-27-29/>

- **BSECS (British Society for Eighteenth-Century Studies)**

The International Society for Eighteenth-Century Studies (ISECS) International Congress, University of Edinburgh, Edinburgh, Scotland, 14-19 July 2019.
<https://www.bsecs.org.uk/isecs/en/>

- **The Hume Society**

The 46th International Conference, University of Nevada, Reno, Nevada, USA, 22-26 July 2019.

<http://www.humesociety.org/conferences/>

- **INEM (International Network for Economic Method)**

The 14th Conference, University of Helsinki, Helsinki, Finland, 19-21 August 2019.
<http://www.econmethodology.org/inem2019.html>

- **ENPOSS (European Network for the Philosophy of the Social Sciences)**

The 2019 Conference, The National Technical University of Athens, Athens, Greece, 28-30 August 2019.
<http://enposs.eu/2013/09/enposs-2014/>

- **EAEPE (European Association for Evolutionary Political Economy)**

The 31st Annual Conference, SGH Warsaw School of Economics, Warsaw, Poland, 12-15 September 2019.
<http://eaepe.org/>

- **THETS (The History of Economic Thoughts Society)**

The 51st Conference, Goldsmiths, University of London, London, England, 5-6 September 2019.
<https://thets.org.uk/>

- **ECP (Economic Consequences of the Peace Centenary Conference)**

The Centenary Conference on the Keynes's Economic Consequences of the Peace, King's College, Cambridge, England, 9-10 September 2019.

<http://ecp.econ.cam.ac.uk/>

• **IWA (International Walras Association)**

The 10th Conference, The University of Lausanne, Lausanne, Switzerland, 13-14 September 2019.

<http://wp.unil.ch/walras/>

• **EAJRS (European Association of Japanese Resource Specialists)**

The 30th Conference, Department of Japanese Studies, Sofia University, Sofia, Bulgaria, 18-21 September 2019 (第30回日本資料専門家欧州協会年次大会) .

<https://www.eajrs.net/>

• **ABFE (Academy of Behavioral Finance & Economics)**

The Annual Conference 2018, New York, USA, 18-21 September 2019.

<https://www.aobf.org/>

• **HETSA (History of Economic Thought Society of Australia)**

The 32nd Conference, The University of Sydney, Sydney, Australia, 2-4 October 2019.

<https://www.hetsa.org.au/>

• **IASS (International Adam Smith Society)**

2020 IASS Tokyo Conference, The University of Tokyo, Tokyo, Japan, 15-17 March 2020.

<https://smithsociety.org/2020-tokyo/>

• **RES (Royal Economic Society)**

The Conference, Queen's University Belfast, Belfast, Northern Ireland, 6-8 April 2020.

<https://www.res.org.uk/event-listing/annual-conference.html>

• **ESHET (European Society for the History of Economic Thought)**

The 24th Annual Conference, University of National and World Economy, Sofia, Bulgaria, 28-30 May 2020.

<http://www.eshet.net/index.php?a=23>

• **HES (History of Economics Society)**

The 47th Annual Conference, Utrecht University, Utrecht, Netherlands, 18-21 June 2020.

<https://historyofeconomics.org/conferences/upcoming-hes-conference-locations/>

(上宮智之・笠井高人・南森茂太)

追悼

浜林正夫先生の思い出

浜林正夫先生が今年 5 月 19 日に亡くなられた。先生は私の大学院時代の指導教官であった。すでに『イギリス市民革命史』および『イギリス革命の思想構造』という名著を物され名実ともにイギリス市民革命史研究の第一人者であった。当時、先生の「本籍」は東京教育大学にあり、併任扱いで一橋大学の学部講義と大学院ゼミナールを担当しておられた。先生は経済史についても造詣が深く、研究テーマも定まっていなかった私のゼミへの参加希望を快く承諾してくださった。1976 年に私は一橋大学経済学部の専任講師となったが、それから 2 年後、教育大学の廃校と筑波大学の新設にさいして当局から「厄介者」扱いされていた先生を「同僚」として受け入れるはめになった。着任後、先生はすぐに学部・大学院の講義・ゼミを担当された。とくに大学院ゼミは「イギリス史研究会」といった趣のものとなり毎回研究報告がおこなわれた。私も参加させていただいた。先生はどのような報告にも辛抱強く耳を傾け、できる限りのアドバイスを与えておられた。

周知のように、浜林先生は政治理念としてマルクス・レーニン主義を奉じる歴史家であった。そうした政治的立場にある先生が、なぜイギリス近代史の研究を続けるのか、そうした研究にどのような意味づけをなさるのか、私はいつも疑問におもっていた。先生のお答えはある意味で明快であった。政治活動と学問研究は別物だということである。浜林先生の歴史研究は一橋大学の伝統を継承する実証史学に基礎をおいていた。一次史料（文献）を活用し「史料に語らせる」解釈を文献にほどこして、主にイギリス市民革命の歴史やその思想構造を叙述し、まとめあげていこうとするものであった。みずからの政治的立場を研究から分離したことにより歴史主義が先生の学問を色濃く特徴づけた。もとより、先生は歴史主義にオポチュニズムをもとめたり政治的「問題意識」を嵌め込んだりする凡百の「歴史研究者」とは比べものにならないほどの傑出した歴史叙述家（ヒストリアン）であった。しかし、残念ながら、そうした先生のお仕事から私が学問的影響を受けることはなかった。

学問上の先達として私が先生から恩義をうけたのはイギリスの歴史家ホブズボームの著書『産業と帝国』を先生と共同で翻訳したときである。ホブズボームのこなれた英文をどのような日本語に移しかえるか、困って相談すると、その都度じつに的確なアドバイスをいただいたのを憶えている。翻訳がある程度進んで出版の見通しがついた頃、私は先生からある依頼をうけた。経済学史学会の代表幹事を引き受けるはめになったので、事務局を担当してくれないか、またそのために経済学史学会に入会してほしい、ということだった。これは私の研究活動にとって重大な転換点となる出来事であった。その後、先生の歴史に対する研究関心と私が（経済学史をふくむ）経済史の研究によって触発された問題意識との懸隔がますます著しくなってきたからである。それはともかく、代表幹事としての先生の学会運営はじつに見事であった。私への遠慮のためか、私のおこなうべき事務作業のかんりの部分をご自分で、さっさと片付けてしまわれた。幹事会を構成する一流の経済学史家たちの多様な意見を巧みにまとめあげ、具体案を次々に実行していかれた。

代表幹事退任後、先生は若手研究者の養成に努力され、上述の「研究会」からは多くの歴史研究者が育った。かれらが中心となって退官記念論文集の出版も実現した。しかし、一橋大学をお辞めになったのち、浜林先生は活動の中心を歴史研究から民主主義運動のほうに移して行かれ、そのための啓蒙活動として著述や講演に熱心に取り組まれた。いまはただ、いつも笑顔を絶やさずに私のいろいろな相談事

に耳をかたむけてくださった先生のお姿を思い出すばかりである。

(神武 庸四郎)

(前事務局のミスにより、郵送された版では浜林名誉会員への追悼文が脱落しておりました。既にウェブでは53号修正版を掲げておりますが、ここに改めて掲載いたします。故浜林名誉会員および神武会員には多大なご迷惑をおかけしました。——前事務局)

山崎怜会員

山崎怜先生が2019年7月20日享年88歳でご逝去された。香川大学、日本福祉大学、岡山商科大学で教授を歴任されたほか、本学会幹事、日本学術会議会員も務められた。

先生は1930年12月15日に高松市にお生まれになった。香川大学経済学部でワルター・オイケンを学ばれて以来、「自由主義経済思想が国家をどうとり込むか、あるいは公共性をどう処理しうるのか」(『経済学体系と国家認識』2000年)を研究テーマに据えられた。神戸大学大学院でのスミス『グラスゴウ講義』研究を皮切りに、スミス国家論という独自の研究領域を開拓し、深化させた。『国富論』を私的収入と公的収入の両輪からなる総分業体系とする解釈は、スミスに絶対的な政府規模の縮小を読み込もうとする通説への挑戦でもあった。その挑戦は通説の淵源探索として、『国富論』中に存在しない「cheap government」の用例を同時代の文献に探し求める「ワード・ハンター」へと先生を駆り立てた(『《安価な政府》の基本構成』1994年)。40年にわたる用例探しに多くのエネルギーを注ぎ込んだと先生は言っておられた。膨大な文献の山と格闘する山崎先生らしい研究である。スミス国家論研究は初期スミスのスコットランド認識の研究から、スコットランド歴史学派の研究にも展開していった。

敬愛する内田義彦の影響だったのかもしれないが、先生はクラシック音楽や芝居にも造詣が深かった。音楽や芝居への関心は『経済学と人間学』(1994年)あるいは『アダム・スミスに遊ぶ』(2013年、私家版)所収の論稿やエッセイから窺い知ることができる。また故郷香川を愛した人でもあった。私は山崎先生の後任として先生が退職される1994年の前年に香川大学に赴任したが、その頃は長年調査を続けていた香川県出身の童話作家村山籐子の伝記研究を公表し始めた時期で、作品集の編纂にも取り組んでおられた。

およそ10年後に公刊にこぎつける『アダム・スミス』(2005年)の原稿の遅れをしばしば気にされていたことや、先生にとっては追い風とも言えるシヴィック・ヒューマニズム研究の盛り上がりを大いに喜んでいたことなども、山崎先生の思い出として記しておきたい。

(柳沢 哲哉)

編集後記

第 54 号をおとどけします。はじめにいくつかお詫びしなければなりません。6 月の総会の冒頭でもお詫び（報告）しましたが、会費の支払い方法を変更せざるをえなくなったことや学会新サイトの運用が十分な説明のないまま始まったことによって、年度当初からさまざまな混乱が生じました。その多くは、学協会サポートセンターが解散したことにとともに、それにかわって学会事務局が膨大な量の不慣れな事務作業をこなすのに、予期していた以上に多くの時間と労力を要したことによります。今年度はじめに学会事務局の増員をはかって対応に努めてきましたが、ご迷惑をおかけしたみなさまには、この場をおかりしてお詫び申しあげます。現在もなお、新たに発生する予想外の事態への対応に追われているため、今後もいたらぬ点がいろいろとあるかもしれません。ご了承くださいませ幸いです。

6 月 1 日・2 日に開催された第 83 回経済学史学会大会は、大会校である福岡大学の山崎好裕会員をはじめとするみなさまのおかげで充実したものとなりました。あらためてお礼申しあげます。学会創立 70 周年を迎える来年の学会は北海道大学が会場となります。

科研費「国際情報発信強化」の交付は今年度で 4 年目に入ります。若手研究者を中心に海外の学会での報告や学会誌への投稿が順調に増えているほか、『経済学史研究』の英文比率も上がっています。しかし、日本の研究の弱点のひとつとして指摘される国際的な共同研究も、学会の国際的なネットワークの形成も、まだ十分とはいえないようにみえます。2020 年 3 月には国際アダム・スミス学会が日本で初めて開催されます。こうしたさまざまな機会をとおして、海外の研究者との実質的な研究交流がいつそう広がるよう期待したいと思います。

この 4 月から 2 年間、佐藤方宣会員、本吉祥子会員とともに学会事務局の仕事を担当することになりました。どうぞよろしくお願いいたします。（出雲 雅志）

事務局補佐（書記）を担当することになった佐藤方宣です。本号の発行が遅れましたことを深くお詫びいたします。4 月から前事務局より業務を引き継ぐこととなり学会運営全体に関わるさまざまな資料に触れるにつけ、これまで自分はこの学会のフリーライダーだったのだなと身に染みて思い知らされております。不慣れな業務にただひたすらに戸惑うばかりですが、事務局補佐として、本吉会員と協力しながら、なんとか会員の皆さんへのご迷惑を最小化できるよう努めてまいる所存です。

（佐藤 方宣）

事務局補佐（庶務）を今年度より担当することになりました本吉祥子と申します。以前、馬渡尚憲先生が代表幹事になられたときも事務局のお手伝いをしておりましたので、約 20 年振りとなります。過去と比較すると、幹事や各種委員会に所属する会員の職務が増え、迅速な処理が求められているように思います。会員が円滑に職務を行い、経済学史学会が今以上の活動をできるように補佐するのが私の役目だと考えております。

この度の学協会サポートセンターの解散に伴って、引き継いだ初めての職務がいくつかあります。不慣れな点も多いことから、会員の皆様にはいろいろとご不便をおかけすることが出てくるかも知れません。代表幹事の出雲先生、書記の佐藤先生とともに、かかる問題・課題に対して一つ一つ丁寧にかつ迅速に対応していく所存ですので、ご了承頂けると幸いです。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

（本吉 祥子）

経済学史学会では下記のホームページとメーリング・リストを援用しています。

- ・ホームページ <http://jshet.net/> 大会プログラム、入会申込書、会員新刊のお知らせなど、多くの情報があります。

- ・メーリング・リスト 現在、約 400 名の会員の方が参加されています。アドレスをお持ちの方は、ぜひご参加ください。参加希望の方は、企画交流委員会 (admin@jshet.net) にご連絡ください。

『経済学史学会ニュース』第 54 号

2019 年 7 月 31 日発行

経済学史学会 代表幹事 出雲 雅志

事務局・連絡先 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1

神奈川大学経済学部 出雲 雅志 研究室

TEL: 045-481-5661 (内線 4773)

E-mail: secretariat@jshet.net
